

文科省の池原参事官が資料 12-2-1(月探査 WG)と資料 11-2-2(探査の実績)を説明した後、下記の質疑応答が行なわれた。

(中々発言が無いので)

青江: こういう形で、若干では御座いますけれど、回数を重ねまして、ご議論いただき、その報告をいただき、そして、この長期計画の中に溶け込ませて行く、と云う風に致したいと思う訳で御座いますが。

(更に発言が無いので)

青江: 田中先生、一寸お伺いしたい。探査と云うことの意義とでも言いましょうか、科学の観点からの意義と云うのは良く解る。それから宇宙というコミュニティー内における影響力、存在感、と云うものを確保すると云う意義も解る。国際政治と云う、ワッと広げた、その視界の中で、こういう形で各国から踏み出そうとして居る、そして中国も、かなり意欲的だ。こう云う状況下での、日本も兎も角ピッチに出る。と云うことと云うのは、そう云う視点から見るとどういう風なものだと云う風に、意義付けか何か、その角度から強く意義付けが出来るのかどうなのか。と云うのは如何なのでしょう。

田中: 実際は中々難しく、やや突き放して云うと、国民の気の持ちようだと云う話ではある。古典的な国際政治の考え方からすれば、最先端の事を行なうか行なわないかと云うのは、その国の国力の反映ですから、その国が国際社会、或は国際政治の中で、影響力を競う主体として行動すると云う

【議事(2)】 その他(月探査ワーキンググループの設置について)

のであれば、最先端のところを競争しないと云うのは、そもそも余り無いことであろう。これはやや伝統的な国際政治の見方で、民主主義国の国際政治のあり方と云うのは、最終的には国民が、納税者として判断するわけですから、「そんなところで競ってどうするの。」と云う風に、国民が冷めてしまうと、余り支持が集まらないということになるかも知れない。勿論、これはやや微妙なことになりますが、最悪の場合、最先端の、特に宇宙とかと云うようなところの、技術開発要素に従事して無いと云うことは、長期的な安全保障上の問題をジャッジ(?)する可能性もある。と云うところは、やや古風な国際政治感に繋がるどころです。日本では、宇宙開発についてそう云う考え方をしないわけですから、そのところが一寸切れちゃってるところがあります¹。ですから、

¹ 日本の「軍事的活動を専ら行なう」防衛省が、宇宙の活動に直接関与していないからと言って、「そう云う考え方をしない。」と決めてしまうのは如何か。長期的な安全保障を無視して、宇宙の活動に関する計画を立案するのは、重大な、致命的な、誤った判断を下す危険がある。

アメリカの考える月探査は、火星移民に向かった第一歩(または第三步)であり、アメリカが「火星移民を推進できる唯一の国」にならないようにするのが、欧州、ロシア、日本、中国の責務である。アメリカもまた、他国にそのような心配をさせないよう、国際協力プログラムとして呼びかけを行なっているのである。

中国は、単独であっても進める意思があるようなので、欧州、ロシアとは、多少違う考え方なのかもしれない。(覇権主義?)

やっぱり、アメリカにしても、嘗てのソ連・ロシア、今の中国にしても、そう云う国が月探査をしようと言ったときに、全く軍事的意味合いが無いかと言えば、無いことはない²。ですから、そうすると、軍事的意味合いを認める限りにおいては、ひょっとして、宇宙を使って、軍事的な、何と云うか、技術ブロックで、とてつもない優位にたつ点が現れたときに負けないようにするためにどうするかと云う風に発想して行けば、此れは、何とか追いついていかなければいけないと云う話になる³。ただ、その辺は、矢張り、かなりの程度は国民がそう云うリスクをどういうものかと云うことに繋がる。

青江:国民が少しさめているのかナアと。心配をして居りましてですね、これからどういう論理の整理をした上で、まあ、日本も出ようじゃないかと、そう決め得るのかどうなのか、まあ、こういうことで取り敢えず、ワーキンググループと云うものを設けさせて頂いて、議論を進めさせていただく。また、〇〇して行って貰うと云うことでよろしゅうございましょうか。

米倉:あの、此れ、1兆円でしたっけ。大体。探査に。予算設定さ

² 軍事的意味合いに限定する必要も無い。例えば、アメリカには「太陽発電衛星」の計画があり、一向に進められないで居るが、此れが動き出すときには欧州やロシアと協力して、国際協力プログラムで進める必要がある。アメリカだけが太陽発電衛星を持ち、世界のエネルギーを手中に収めると、他の国の安全保障は崩壊してしまう。

³ 上記、注2に示すように、「軍事的優位」でなくても良い。「何とか追いついて行かなければならない。」は、仰る通りである。

れたか?

青江:1兆円…

米倉:で、あの、今のお話で、財政状況が非常に厳しいですから、ある種のリードニングをして行かなければいけないのだろうと云うことですね。ただ、黙って見ていていいのかと言われると、国民の多くは、やっぱり、やった方が良いと思うとは思うのです。

青江:はい、取り敢えず、こう云う形で議論を進めさせて頂きたい、と云う風に思います。

事務局 池原:鶴田先生。

青江:お願いをすることで御座いますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げたいのですが。

鶴田:あの、何か恐ろしくて、とても私では座長務まらないのではないかと思っているのですが、メンバーの方に助けて頂いて、何とかやっついこうと思います。まあ、来月 SELENE が上がりますので、日本は、(割り込み)

青江:ごめんなさい。あの、SELENE の打上げの延期を、皆さんにご報告するのを忘れていました。

鶴田:あの、結構です。何ヶ月か遅れても其れは余り影響ないですから。私の考えでは、日本が月探査と云うことで世界の一流国としてデビューするのですよね。ですから、そう云う観点余りなくて、外国で沢山成果が上がっているから、日本が後追いでやっているように、何となく受け取られると仰ったのですが、実は、SELENE を立ち上げた十数年前の時は、月など誰も見向きをしなかった時代なのですね。アポ

ロの後何も無くて、ヨーロッパではモロという、SELENE みたいな大きな計画を立ち上げようとしたのですけれど、いとも簡単に切り捨てられてしまった。そう言う時代に SELENE は立ち上がった。で、まあ、コンセプトとしても、十分探査をスタートするための調査を徹底的にやると言うことで、良い計画であったのではないかと思うのですが、まあ、沢山の探査計画を諸外国に見ていますと、何か、今昔の感と云うように感じる。ワーキンググループは、多分そう言う国際的な位置付けの中で、日本の探査をどうやって立ち上げ、発展させていくかと云う議論と、もう一つ、先程来議論になった、プログラムの目的と云うか、そう言うターゲットを何処に設定するかと云うことと関係すると思うのですが、宇宙探査の中で、太陽系の、或は系外の探査と云う、もう一つ大きな流れの中に、月がどういう風に位置付けられるのかを議論していかないと、これは、今後、どこかがギクシャクするのではないかと思っています。そう言う議論を…内容的には未だ良く解らないところがありますが、報告書をまとめることが出来たら、其れを使って議論頂くと云うことになろうかと思っています。

池上:メンバーを見ますと、産業界の人が入って居ないのだけれど、その辺の視点はムニャムニャ。つまり、今、資源開発はソングトンデナイトコタイますけど、そう云うのは、何か。

鶴田:そう云う風に考えて居なかったのですが、資源開発と云う前の段階のような気もするのですよね。此れは、月の議論は、どうしても、ツキチカツで、色んな考え方が出るもので

すから、非常にこう、先まで見た需要の形態が、ザンギロンの中に入って来易いのですが、SELENE が、実は、月資源も含めて、徹底的に調査するわけで、其れの成果のあとに、資源開発が可能かどうか、やる価値があるかどうか、と云うようなことも、多分、議論されることになろう。ですから、其処を、ワフルアップをした段階でサギョウタンチから入るのが良いのか、今ハイされて、多分、大部分余り関心が無いと云うことになると思っていました。

池上:因みに、我々よく言うのですが、車は大体1グラム1円であると。で、〇って、やっぱり、数万円になるわけです。ところが、携帯電話と云うのは数千円位。ですから、グラム当りで言わなくて、かなり大変な様ではあるのですが、キーもあれ2千円位しますからね、宇宙も数万円位だと、良い物だったら良いわと云う感じも無いわけではない。その辺も将来議論していただくと。

鶴田:そうですね。だから、月はそうやって出来たかと云うことに、かなり依存するわけですね。月が生まれてから現在まで、どういう地質学的な変化をしてきたか。何も無くて、ただ砂だけだったらつまらない。と云う、歴史的な変遷があったかどうかと云う、そう云うことを正に調べると云うのが SELENE です。

青江:はい。有難う御座いました。それでは、こう云うことで進めさせて頂きたいと思います。